

創建

そうこん

2013・3・25 VOL.47 NO.4 (通巻145号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

巻頭言：浅里和茂・1

復興に向けた活動紹介③・2

博士（工学）学位論文・3

大学院特別講義聴講報告（大原一興先生）・4

大学院特別講義聴講報告（川島晃先生）・5

インド留学記①／教室ニュース・6

修士学位論文発表会／卒業研究発表会・7

卒業式・修了式の表彰者／学術発表／卒業設計・8

アベノミクスがレーガノミクスの日本版になるかどうかはさて置き、景況感が雰囲気だけでも出て来たことは気分が少し良くなります。それが復興予算に負うことがあって複雑な心境ですけど、日本人の気持ちが明るくなるのは悪いことではないはず。今も昔も消費と気持ちの関係はやはり強く、不況下で成人した世代よりも今の消費の中心は40代、50代以上と言われているのうなずける気がします。ですから企業のマーケティングもその世代を当然狙うわけで、狙われている自分がここにいます。昨年のCD売り上げが伸びたのはここを狙ったベスト盤がヒットしたから、桑田佳祐、山下達郎、松任谷由実40周年、ついでに野宮真貴と小泉今日子の30周年を買ってしまった自分はその典型例でAmazonの思う壺です。その中でイギリスのローリングストーンズというバンドも50周年を迎え記念CDボックスを出しました。ストーンズと言えばミック・ジャガーとキース・リチャーズでありロン・ウッドなのですが、ここにビル・ワイマンというベーシストがいたことはあまり知られていません。恐らくドラムのチャーリー・ワッツよりも地味で無名のストーンズメンバーという風変わりな代名詞で語られてしまう人です。この人については「ローリングストーンズにおけるビル・ワイマンの役割」と、これまた奇妙な言葉で語られています。誰が曲を作ってもジャガー&リチャーズとクレジットされてしまうようなバンドの中で、目立たず人間関係のクッションや接着剤の役割を果たす寡黙なメンバーと意識すればいいのだと思います。それでいて無くてはならない人材、余人に替え難い人としてみんなに認識されていれば最高ですが、彼の場合は1993年に

辞めているので実際のところは不明です。少なくとも若い頃はランチボックスの取り合いでケンカをするような仲間の中で一定の役割を果たしたと信じたいところです。でもこんな役割の人間がチームや組織には必ず必要だと思います。日本風に言うとホームランバッターばかりでは勝てないからバントをする人間が必要だとか、メッシや澤が10人いても勝てない（多分）となるのでしょうか、これとは少し違うのではないかと。ビル・ワイマンはホームランバッターだったかもしれないけど、バンドを成功させることを第一に考えたのではないかと。現在、みんなはホームランバッターですか。10番を背負っていますか。今はそうではないでしょうし、卒業生にとってはようやくスタートラインについたばかりですが、将来はそこを目指して下さい。

ストーンズの ベーシスト

教授 浅里和茂

皆さんが卒業して働く社会は必ず組織で成り立っています。そして組織で仕事をする、おもしろいもので必ず仕事量には濃淡が出てきます。例えば10人のチームだと2人（20%）は猛烈に働く人、2人（20%）はほとんど働かない人、あとの6人はほどほどに働く人というような格差が生まれてきます。これは優秀な人材ばかりを集めた場合でも、必ずといっていいほど生じてしまうと言われています。これがチームの問題となるのは役割として格差が固定してしまい、いつも働く人と働かない人が決まってしまうことです。このような役割が続いてしまえば、最初の

2人のモチベーションが維持できないのは言うまでもありません。本来はもっと組織は流動的であるべきで、仕事量の多い人間がチーム内で入れ替わっていくべきでしょう。仕事をしない代わりに食事をごちそうしてしのぐ人もいますが、それだけではチームからいずれ見放されて長続きしません。ごくまれに食事中的の会話を通じて組織をマネジメントしてしまう人もいますが、例外中の例外でマネジメントという仕事を立派に果たしているといえます。さきほどの流動的な組織が成立していくためには、個人が強い目的意識と能力を持っている必要があります。皆さんが生まれる以前の高度成長期には、仕事をしない2人でも組織の潤滑剤になれるなら企業は雇用し続ける余裕がありましたが、現在の国際的な競争のなかではそのような余裕がありません。もちろん企業も最初から高い能力を持った人材を求めているのではなく、そうなるであろうと期待できる人材を求めているのです。在学中の皆さんも卒業する皆さんも、一歩ずついいから自分の将来のために、自分磨きを続けてください。その成長のスピードには当然個人差がありますが、目標を持って続けることが出来る人には、必ず到達するゴールが見えてくると思います。その努力の結果、ビル・ワイマンのように生きるもよし、トップを走ってがんばることも出来る。そのような幅広い人生の選択肢があるとしたら、充実した毎日が過ごせるのではないのでしょうか。明るい明日があるとしたら、最初の一歩をはじめてみませんか。

さて、故スタンゲッツの全集CDボックスセットなんてのが発売されたらどうしよう。

(学科主任)

東日本大震災・復興に向けた活動報告③

木造仮設住宅の今後の展開から考える復興に向けた住環境形成

准教授 浦部 智 義

震災から2年を経た現在でも、福島県の避難者は、元の居住地への復帰か否かも含めて、先が読めない状態で、仮設住宅や借り上げ住宅等の仮住まいでの生活が続いている。様々な要因が複雑に絡み合ったこの問題の解決には特効薬は無いのかも知れないが、私の研究室を含む我々のチーム（はりゅうウッドスタジオやログハウス共同企業体等と協働）も計画・設計・建設に参画した木造仮設住宅の今後を手がかりに、復興に向けた住環境形成を考えて見たい（図1）。

■中期仮設住宅の提案

振り返ってみると、我々が提唱している「中期仮設住宅」の発想は、木造仮設住宅の最初の公募時（2011年4月）には提案していた。「中期仮設住宅」とは、言うなれば基礎をコンクリートで提案したり一般住宅のように長期間の住める性能を持った県所有の仮設住宅である。我々は、避難が長引くことを予測して、その「中期仮設住宅」が必要になった時に、仮設住宅を解体・移設して供給しようと提案をしていた。震災の影響に加え、縮退や過疎が同時に進行するであろう福島では、復興に際して住宅デザインにとどまらず、時系列で見た住宅供給のあり方も同時に考えるべきだという意識があった（図2）。

■木造仮設住宅の再利用

解体・移築や再利用の観点から木造仮設住宅の工法を見ると、例えば、在来+木質パネル工法は、プレハブ仮設の効率性を木造に取り入れるなど、現場での施工性の向上と解体・移築性を意識した工夫が多く見られる。木造板倉工法は、柱への板材の落とし込み工法で施工され、木材使用量も高く、復興住宅としてもそのまま利用できるものもある。また、ログハウス型即ち丸太組工法は、構造となるログ材が外壁・内壁・断熱材も兼ねるため（今回の広域災害の建材不足に対して）も有利であった。解体・移築が容易に可能で、建設時の部材品数が他工法に比べて少ない点において、解体・移築性からの仮設住宅の再利用を初期から意識しているタイプと云える（既に1棟は解体・移築を行って検証されている）。また、転用後の立地場所も準防火地域が可能である。

震災から2年経過し、いわゆる「仮の町」も含めた中期的な住環境整備には、RC造による集合住宅型の災害公営住宅の建設の方針が出されているが、それ以外にもコンクリート基礎や間取り、防火地域など立地への適応も含め一部仕様を変更し木造仮設住宅を転用・再利用して当てる選択肢も考えられるのではなかろうか。

■「仮の町」のすがた

町がまるごと移動する様な「仮の町」は個人的にはあまりイメージ出来ないが、この「仮の町」も時系列で考え柔軟に対応しないと、最終的に住宅等の需給バランスは悪くなってしまう。また、仮設住宅団地単位の様なそう大きくない集落が分散した形の「仮の町」（我々は以前から、場合によっては現在の仮設住宅建設地をそのまま利用することも提案している）であっても、町という意味では、必要な施設をどうするかという問題になる。もちろん最低限必要なものは揃えるべきであろうが、教育、医療や福祉といった施設のあり方も、従来の様にハードとして均質な施設整備に過度に頼らなくても、サービスを提供できるスタイルや制度の検討が必要かも知れない（これにも、仮設住宅の再利用した「中期仮設施設」の検討の余地があるかも知れない）。いずれにしても、「仮の町」は、いわき・郡山・福島・会津若松など都市部に、職や公的サービスなどをある程度依存する形が現実的であると考える時、「仮の町」と受け入れ自治体や母都市が分断せずにつながる仕組みづくりも必要であろう。

そういう意味でも緩衝材としての「中期仮設住宅」の充実、個人としても自治体としても選択の幅を広げる重要な意味を持っていると考えている。

■今後の展開に向けて

我々のチームも関係しているが、現在、県主導で幾つか木造仮設住宅を解体・移築が実行され、技術面のみならずコスト面での検証が行われている。「中期仮設住宅」の必要性も含め、その仕組みや方針づくりの分析においては、住宅性能を担保した上で木造だけでなくプレハブの利用（プレハブ仮設も多くは県所有）もあり得るかも知れないし、県所有だけでなく、避難者を中心に希望に応じて払い下げという選択肢も考えられるかも知れない。一方で、我々のチームでは、ボトムアップ的な取り組みとして、復興に向けて「中期仮設住宅」も含め我々の活動が避難されている方にとって現実的なことかどうかの確認のために、郡山にそれらを意識できる場所の実現をとということで、まちづくり・ワークショップ等の活動拠点にもなる小規模集落モデル住宅群の建設に取り組んでいる（図3）。今後は、それら行政の動きとボトムアップ活動の連関がキーになるかも知れない。

〔参考文献〕 1) 長期避難期からの計画論（特集：「福島と建築学」）、日本建築学会、建築雑誌2013年1月号

2) 木造仮設住宅の供給プロセスと住環境整備に関する研究、早川真介、日本大学工学研究科研究生成果報告書、日本大学工学研究科、2013年

図1～3製作・提供：浦部研究室+はりゅうウッドスタジオ



図1 時間軸で考える震災後の復興に向けての課題予測

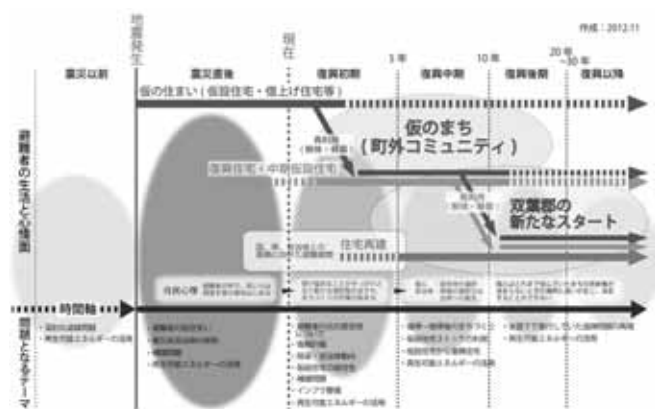


図2 時系列でみる木造仮設住宅の位置



図3 郡山まちづくりプロジェクト
—全体スタディ模型写真—

平成24年度 博士（工学）学位論文

平成24年度は、博士後期課程に在籍する杉山和隆院生が博士（工学）の学位を取得された。

次にその論文要旨を掲載し、ここに祝福したい。

「建物における歪縮小・復元解析法に関する研究」

建築学専攻 杉 山 和 隆

建物全体だけでなく、建物細部の応答を立体的に把握可能にするモデルとして、有限要素法モデルが一般的に知られている。これは、建物を細かく要素分割することにより、建物細部までの応答を把握可能にするものであるが、同時に未知数が膨大となる。多くの柱・梁・床部材で構成される立体的な建物の細部までの応答について有限要素モデルを用いて把握することは、今日のコンピュータ性能を以ってしても現実的な手法ではない。また、構造物に生じる応力や変形を解析する目的は、工学的に必要な精度で構造物の実際の挙動を表現することである。少ない自由度で精度の良い応力、変形挙動を表現するモデル化の方法を開発することは、解析法の未知なる分野を開拓するものではないが重要である。

構造物を細かく構造要素に分割した多自由度のモデルから少ない自由度のモデルを求める方法に動的縮小法がある。動的縮小法は、大きい主変位から小さい従変位を精度よく消去する方法である。これは、未知数を大幅に減らすことができ、また、主変位に対して従変位が小さければ小さいほど、精度が向上する。さらに、現在精度を向上させるために、並進変位及び回転に比べ、歪が十分小さいことを利用した歪置換法を用いている。

そこで本研究では、建物の振動解析における有限要素モデルの未知数を大幅に精度よく低減し、建物の変形や応力を求めることができる解析法を提案するとともに、その有効性ならびに一般性について検討をしている。本論文は、第7章から構成される。

第1章では、本論文の研究目的と背景及び研究の範囲を述べ、振動解析における既往の研究を示し、本研究の位置づけを行っている。

第2章では、多自由度系振動方程式の縮小法として、動的縮小法について述べている。

第3章では、1自由度系における縮小・復元法

による解析を提示し、フレーム構造における縮小式の比較検討を行っている。最初に簡単な梁柱モデルにおいて、本手法の有効性を確認し、その上で、実際の建物を想定した5層3スパンにおける純フレーム鉄骨造で解析を行った。その結果、縮小した波形と元の構造物の主変位における応答波形を比較すると、振動応答性状はほぼ等しくなった。

第4章では、材端変位差を利用した歪置換法について述べている。トラス構造における縮小方式を提案し、主変位において振動による比較検討を行っている。目標の節点に主節点を決め、そのほかの節点を従変位と位置づける。そして、主節点以外を従変位に歪置換した後、動的縮小法を用いて消去を行い、1質点系へ縮小を行った。さらに、求めた縮小式より未知数の解を復元し、その比較検討も行っている。

第5章では、粘弾性梁理論の基礎式から、粘性及び履歴減衰を含む要素の振動方程式を誘導するとともに、それを用いて多自由度系の振動方程式を構成し、1自由度系への縮小かつ復元する歪置換法を提示している。1層2スパンの純フレーム鉄骨造を解析対象とし、5節点の水平方向変位を主節点、それ以外の節点を従変位として解いている。

第6章では、歪置換の確認として、各モデルにおいて歪置換がなされているかの検討や1質点に縮小した際の値について検討を行っている。

第7章では、結論として2～6章で得られた研究成果を総括している。

* 当該論文の審査委員会は、下記の4名であった。

主査：倉田 光春（日本大学工学部 教授）

副査：浅里 和茂（日本大学工学部 教授）

川島 晃（日本大学生産工学部 教授）

安達 俊夫（日本大学理工学部 教授）

大学院特別講義聴講報告

「持続可能な健康長寿なまちづくり」(大原一興先生)を聴講して

大学院博士前期課程1年 小室 加津彦

平成24年11月6日(火)、「持続可能な健康長寿なまちづくり」と題して、大原一興先生(横浜国立大学教授)による大学院特別講義が、70号館7033教室で催された。

わずかな時間ではもったいないほど多岐にわたる内容に、自身の未熟さを感じつつ、私なりにまとめてみたい。

まず講義は、「そもそも“施設”とは何か」という問いかけから始まった。ここでの“施設”とは、高齢者向け施設のことである。今でこそ歴史の研究室に籍を置く私だが、何を隠そう学部時代は、建築計画の研究室で高齢者・就学前児童施設について学んでいた。そのため、このテーマには馴染みがあり、懐かしくも思えたが、それもつかの間、次第に違和感を覚えるようになっていった。

それは、「“施設”とは何か」に対する大原先生のアプローチにあった。疑問解決のため採られたのが、社会的弱者の施設がどのように現れ、広がり、現在の体制が作られるに至ったかを読み解くという方法だったからである。系譜を読み解くことで、今後のあるべき姿を考える。これは歴史学のアプローチそのものではないか。

それはともかく、そうした系譜の探求によって、機能が分化しすぎて全貌が分かりにくくなった各種の社会的弱者の施設には、その起源である住宅に戻ろうとするベクトルが働き始めたとの結論が導かれる。それを先生は、「住宅への回帰」という言葉で表された。大集団施設から小グループの住まいへ、収容施設から生活の場へ。そうした視線が、「施設に入る」という精神的なハードルを下げ、何にでも対応できる住宅の性質を活かし、余りつつあるストックを、地域の資源として活用する試みにつながっていく。間違いなく、“超高齢社会”となった日本には、そうした見方も必要だろう。

あるいはそうした視線は、敷地の中だけを見て建築を計画するのではなく、地域全体を見て計画されるべきという発想にも発展する。そうした事例として、「子どもと遊び研究会」(世田谷)による、まちと施設を一体化させた「路地遊び」が紹介される。そうかと思えば、そこに地域の資源を加えては、との構想も披露される。地域で受け継がれてきた自然や文化や環境を、住民1人ひとりが学芸員となり来館者となる“エコミュージアム”の試みである。ギリシャ語の“オイコ

ス”を語源に持つエコロジーとミュージアムをかけあわせた造語で、具体的な建物が無い場合すらあるため、「屋根のない博物館」とも呼ばれる。先生ご自身が関わられた「三浦半島まるごと博物館」など神奈川で行われた事例を通して、この“エコミュージアム”の紹介がなされた。

その中の1つである葉山の市民団体は、意識の高い活発な活動の半面、文化系・環境系・歴史系などテーマごとに小さくまとまり、交流・一体感に欠けていた。乗り越えるべき機能分化の弊害がそこにあった。そこで、それぞれが得意とする地域資源を解説して廻るツアーを企画。これによって、コミュニティを再編し互いの理解を深めるとともに、地域住民としての責任と自覚が芽生え、地域の将来を創り上げる力が養われていった。

こうした試みは、いわゆる建築計画とは異質なものに思える。それでも、公的施設の代表である博物館の機能とノウハウを取り込み、その地域に住む人々の協力で運営されるエコミュージアムは、やはり建築計画の延長上にあるものなのだろう。“建築”という分野の幅広い裾野と、そこに求められる広範な視野を再度認識させられた。

ところで、講義の最後に先生はこう語られた。

「建築計画とは現代史である」。

この言葉は、先生の師である故鈴木成文先生が常々おっしゃっていたものだという。これをうかがって、私自身が、過去と現在との間に無意識に線を引いていたことに気づかされるとともに、私が講義の冒頭に感じていた違和感も払拭されることになった。

そうした私的なことも含めて、建築における計画の重要性を再発見することのできた、貴重な講義であった。



大原一興先生



講義の様子

大学院特別講義聴講報告

「建築構造力学と構造デザインの歩み」(川島晃先生)を聴講して

大学院博士前期課程1年 千葉 新

今回の大学院特別講義は、平成24年11月27日(火)、本館3階第一会議室にて、院生・学部生・教員を含めて約40名が出席し、川島晃先生(日本大学生産工学部建築工学科教授)による「建築構造力学と構造デザインの歩み」と題する講演が開催された。本講義では、自己紹介から始まり、先人たちが開発した解析方法、オイラーの業績、エッフェル塔を例にした図式力学(連力図法)による”自然なかたち”について様々なスライドや動画を用いて、とても分かりやすく説明していただいた。

まず初めに、自己紹介を通して、たわみ角法に深い係わりのある骨組みの力学を完成させた小野薫博士、応力法に係わりのある斉藤健次博士、塑性力学に係わりのある田中尚博士の考え方や、先生が行われた研究内容を簡単に説明していただいた。その中でも川島晃先生の師である田中尚博士の教えの中にある「軟らかいもの」と「硬いもの」の力学を一つのベクトルで表すことにより、「中間のもの」表すことができること、そしてエネルギーは塊で方向性がないので考えず、力のつり合いを第一義に考えるということを川島晃先生は大事にされていた。

そして、軟らかいものとして伸び縮み自由なケーブルネットのつり合い系、硬いものとして電車のパンタグラフをイメージしたパンタドームのリフトアップ広報に用いる形状解析を例に、「軟らかいもの」と「硬いもの」の力学を簡単に図を用いて説明していただいた。さらに、伸び縮みのないたわみ曲線を描くオイラー座屈荷重の話をしていただいた。本来、部材がたわむと材の長さは元の長さより短くなる。しかし、伸びがないたわみは座屈後に安定なたわみ曲線を作り、不伸張の形態としてアーチの形を描くことができる。つまり、これが不伸張形態解析の起源であり、昔の構造力学は形を作ることと安全性を確かめることを一人の人間が考えていた学問であったことを説明していただいた。

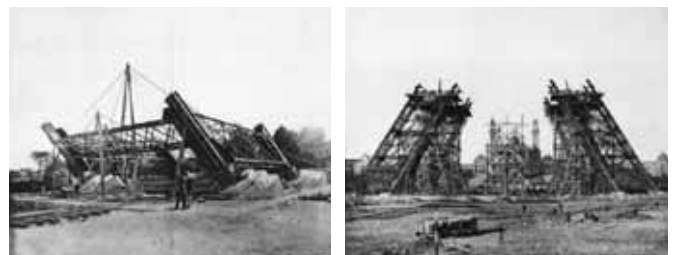
次に一般逆行列を用いた応力法の話へと展開された。不静定骨組みトラスを構造力学における応力法で求めると部材を仮想切断して応力を求めなければならないが、一般逆行列理論を活用した応力法では、仮想切断をする必要なく荷重に釣合う最適近似解である荷重項、材の伸縮を適合させるように荷重項を再分配する応力

である形状係数を用いて応力を求めることができる。このように建築構造力学は先人たちの研究によって発展していった経緯を知る機会となった。

さらに、自然な形と図式力学について、フランスの首都パリに建てられているエッフェル塔を例に紹介していただいた。エッフェル塔に分布している水平方向の風荷重の合力を考え、その合力を用い連力図で表すことにより、エッフェル塔の曲線を創造することができるという話であった。そのときの一階塔脚部の平面角度63.3度を算出することができる。そして不思議なことだが、その高さと底辺の長さの比は黄金比になっていた。また、当時の基礎工事の写真があるのだが、一階塔脚部の立体角度を54.6度にして撮影していた。この立体角度は風荷重による支柱パネルに伝わる軸力が抑えられる角度であり、当時エッフェルは不確定な風圧力に対する余力が期待できる角度として写真を撮ったのではないかと考えることができる。

次に不静定構造であるエッフェル塔をどのように解いたのかの説明になった。エッフェルは基礎梁と1階プラットホームおよび支柱パネルの構成により塔全体を剛体構造とみなし、不静定構造を釣合い式だけで軸力の計算を行った。今回の講義ではリッターの切断法、応力法により計算を行うことができることを、図を用いて明解に解説していただいた。

最後に今回の講義を拝聴し、最近の建築物は奇抜なデザインが多いように感じるが、風や重力などの力から、自然なかたちを創造することの有意を考えさせられた。また、今後、経験の浅い若者が建築をデザインする上でこのような構造デザインが有効なツールとなる可能性を感じた。こうした基礎的な構造力学の大切さや有用性を再確認することができた講義であった。



立体角度54.6度および正面で撮影された
エッフェル塔の施工工事写真^{注)}

注) Looney Palace

<http://www.looneypalace.com/how-eiffel-tower-was-made/>

日本人建築学生のインド留学記

大学院博士前期課程 2 年 三 浦 洵

こんにちは。私は2012年12月21日から1年間アジアの一国であるインドに留学しており、早二カ月が経とうとしています。初回の留学記では、簡単な留学先の大学と現地での食生活の一部を紹介したいと思います。

私が在籍しているのは、インドの首都ニューデリーに設立された、School of Planning and Architectureという大学です。留学生はイランやパキスタンからが多く、私のような東アジアから来るのはかなり珍しいようです。インドでは公用語はヒンディー語とされていますが、英語でも十分通じるため、大学内の日常的なコミュニケーションは英語で行っています。また、簡単な単語、フレーズなどを大学の友人から教えてもらいながらヒンディー語を勉強している最中です。

さて、食の話。皆さんのイメージ通り、学内での昼食や夕食等の場面でカレーが出ない日はありません。「インド＝カレー」の図式はやはり正しいことを確認する一方、インドのカレーは日本のとはずいぶん異なることに気づきます。インドでは数十のスパイスを絶妙に調合して作られ、2、3種類カレーをローティ（小麦粉を練り、平たくして焼いた主食）やインド米につけたり混ぜたりしながら食べるのがスタンダードです。多種多様な種類のカレーがあり、友人とシェアしながら様々なカレーを試せるというのもインド料理の魅力であり、楽しみでもあります。食を通して、言葉や異文化コミュニケーション手法を勉強している感じです。今回は少し慣れたところで、研究内容、日常生活を紹介したいと思います。

なお、今回の留学は、研究内容で相談に快く応じていただいた浦部智義先生、現地大学とのやり取りを全面的にバックアップしてくださったSanjay PAREEK先生、留学に関する事務的な内容で親切に対応してくださった元教務課職員の澤井歩さん等多くの方々のご協力・ご助言がなければ到底実現できませんでした。この場を借りましてお礼申し上げます。



校舎の外観：奥行きのあるファザード
温熱環境対策に欠かせない庇が特徴的



ある日の昼食：
イメージ通りのインド・カレー

■11月16日、日本インテリア学会東北支部主催（支部長・若井教授）の特別講演会「建築家の使命、三浦敏伸VS本間利雄」が本学部70号館で開催された。

■浦部准教授は、12月16日、平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の一環として、郡山市中央図書館にて行われた連続市民講座（第4回）において、「復興に向けたロハス的住環境形成への取り組み」と題して講演された。

■土方准教授は、12月21日、富岡町より福島県復興まちづくりエキスパート派遣事業の講師を依頼され、「富岡町の津波被災地を含めた町内再生計画等について」と題して講話された。

■浦部准教授は、日本建築学会発行「建築雑誌」の2013年1月号「福島と建築学」特集において企画段階から協力し、「福島の地域構造」・「避難の実態とその考察から見る今後」・「長期避難期からの計画論」の執筆等を行った。

■1月12日に最終審査会が行われた、第4回日本大学校門建築学会学生設計コンペティション（審査員：石上純也）において、三浦洵君（浦部研・M2）と新城雄史君（浦部研・M1）の2作品が優秀賞、遠藤一成君、川島慶之君（浦部研・3年）の作品が佳作を受賞した。

■土方准教授は、1月16日と1月28日、郡山市より郡山市中心市街地まちづくりワークショップのアドバイザーを依頼され、「本二町内会の地域コミュニティの維持と新たなルールづくりに向けて～改善策とその実現方法について考える～」と題して講話された。

■浦部准教授は、1月30日、福島県庁で行われた、平成24年度福島県土木・建築技術懇談会「東日本大震災からの復興へ～教訓と課題、リスクマネジメントとして備える～」において、「復興に向けた環境と調和した住環境の形成」と題して講演された。

■市岡講師は、1月30日、郡山市より郡山市史編さん委員会委員を委嘱された。また、2月5日、郡山市史専門委員会委員を委嘱された。

■土方准教授は、2月6日、福島県より福島県景観審議会委員を再度委嘱され、会長に選出された。

教室ニュース

■パリーク准教授は、2月上旬、日本大学長期海外派遣研究員の派遣先から無事帰国された。

■2月16日、鏡石・不時沼地区地下道上屋工事現場の見学会が開催され、学部学生等12名が参加した。

■土方准教授は、2月18日、郡山市より郡山市建築審査会委員を再度委嘱され、会長に選出された。

■浦部准教授は、2月19日、郡山市より郡山市市民協働のまちづくり推進協議会委員を委嘱された。

■若井教授は、2月25日、白河市より白河市景観審議会会長を委嘱された。

■若井教授は、2月28日、福島県より（仮称）福島県医療機器開発センターの建築設

計競技における審査員長を委嘱された。

■浦部准教授は、2月28日発行の舞台照明情報誌STAGINGの特集「東北から考える舞台芸術施設」に、『舞台をつくる』と題して寄稿した。

■浦部准教授は、国際復興支援プラットフォーム（IRP）、内閣府及びアジア防災センター（ADRC）主催で、3月1日に仙台市にて行われたナショナル・コンサルテーション「東日本大震災からの復興」並びに「東日本大震災復興状況報告書」に「福島県における木造仮設住宅への取り組み～ログハウス型を中心に～」と題する報告を投稿された。

■市岡研究室は、3月1日、須賀川市の地域交流館ボタンにて卒業研究報告会を開催した。

■(社)日本都市計画南東北ブロック学術交流会（実行委員長：三浦金作教授）が、3月2日、郡山市・まごっせプラザで開催された。

■浦部准教授は、3月2日、日本大学工学部で行われた第2回市民公開「ロハスの工学シンポジウム」において、「ロハスの地域・まちづくりの契機」と題して講演され、その後のパネルディスカッションに参加された。

■浦部准教授と浦部研究室が計画・設計等に関わった「仮設集会所施設のロハス計画（本宮市）」等のパネルが、2013年3～5月にフランス・ロワイヤン市のコンGRESセンターで開催される「日仏建築デザイン協会主催の3・11後の建築・都市展」に出展された。

平成24年度 日本大学大学院工学研究科建築学専攻 修士学位論文発表会

日時：平成25年2月19日(火) 場所：日本大学工学部 70号館5階 7066・7067教室

<計画・環境系> 7066教室

1. 公園内における移動イスの設置方法に関する研究 青木敦生 (指導：三浦金作 教授・土方吉雄 准教授)
2. 地方都市における中心市街地の緑化手法に関する研究 阿部純也 (指導：三浦金作 教授・土方吉雄 准教授)
3. 勤務時における医師の病院建築内の移動とその意識に関する研究
ー地域の中核的病院を対象としてー 遠藤安泰 (指導：浦部智義 准教授)
4. 階段昇降時に歩行者の足部と段鼻周囲に構成される機能寸法に関する検討 太田成美 (指導：若井正一 教授)
5. 児童の遊び場に関する調査研究
ー市街地特性と遊び行為の関連ー 大貫恵司 (指導：三浦金作 教授・土方吉雄 准教授)
6. レーザードップラー振動計の応用に関する研究 須藤剛史 (指導：濱田幸雄 教授)
7. 劇場・ホールを持つ施設の公演時におけるオープンスペースに関する調査研究
ーホワイエを開放している公立文化施設を対象としてー 高木義典 (指導：浦部智義 准教授)
8. まちなみ景観の色彩規制に関する研究 高橋康弘 (指導：三浦金作 教授・土方吉雄 准教授)
9. 福島県内に立地する屋内子ども遊び場の利用実態に関する研究 高守留珠 (指導：若井正一 教授)
10. 通過歩行場面における頭上のアキ寸法の計測に関する研究 千田龍成 (指導：若井正一 教授)
11. 地域における伝統芸能の役割に関する研究
ー東北6県に現存する能楽を対象としてー 沼尾圭亮 (指導：浦部智義 准教授)
12. 応急仮設住宅の遮音改善に関する研究 橋本博貴 (指導：濱田幸雄 教授)
13. フィレンツェの街路空間における昼夜歩行時の注視に関する研究 松江宜彦 (指導：三浦金作 教授)
14. 中国におけるユニバーサルデザインの展開に関する基礎的研究
ー安徽省宣城市内の公園施設を事例としたUD検証ー 余恋旖 (指導：若井正一 教授)

<構造・材料系> 7067教室

15. 中層RC造建物における耐震補強効果の検討 江原修 (指導：千葉正裕 教授)
16. 鋼製永久型枠を用いたRC造梁部材の曲げ性状における寸法効果及び継手に関する研究
遠藤正美 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
17. RC構造物におけるネットワーク及び補修剤を用いた自己修復コンクリートの開発
大平旭洋 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
18. 竹補強セメントモルタルの性能改善 木村彰吾 (指導：出村克宣 教授)
19. インドにおけるCO₂削減を目的とした無焼成レンガ作製方法の検討 斎藤雄仁 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
20. 有限要素法におけるNURBSを用いた種々梁要素の形状関数に関する研究 関根秀一 (指導：Buntara S. GAN 准教授)
21. 既存鉄骨造はり継手の耐震補強方法に関する研究 本田優 (指導：浅里和茂 教授)

平成24年度 日本大学工学部建築学科 卒業研究発表会

日時：平成25年2月12日(火) 場所：日本大学工学部 70号館1階 7014教室 (五十嵐ホール)

1. 新規な粉末防せい剤を利用したRC構造物用補修材料の防せい性 高野圭奈・手塚伸明 (指導：出村克宣 教授・齋藤俊克 助教)
2. 既存体育施設の耐震性能に関する研究 岩下優 (指導：浅里和茂 教授)
3. 日本大学工学部図書館における耐震補強効果の検討 今村翔太 (指導：千葉正裕 教授・日比野巧 助教)
4. アーチ橋モデルに関する研究 只野源太郎・鈴木豊・星賢護 (指導：倉田光春 教授)
5. 公共工事の入札条件に関する調査研究 山口翔平 (指導：野内英治 准教授)
6. 変断面・Functionally Graded Material梁の研究 遠山貴嗣 (指導：Buntara S. GAN 准教授)
7. 階段昇降時に必要な梁下のくぐり高さに関する実験的検討 田村直久 (指導：若井正一 教授)
8. 福島県内における障がい者グループホームに関する調査研究 齋藤建介 (指導：松井壽則 准教授)
9. 東日本大震災後の福島県内における避難者の動向に関する研究 矢萩逸人 (指導：浦部智義 准教授)
10. 須賀川市におけるまちなかの土蔵活用に関する研究 菊地祐太・石橋拓人 (指導：市岡綾子 専任講師)
11. アーケードのある街路の空間構成に関する研究 (仙台アーケード2012)
清雄将・真砂拓也・岡村英樹 (指導：三浦金作 教授)
12. 公園内におけるスツールの設置方法に関する研究 大矢康隆 (指導：土方吉雄 准教授)
13. 福島県の歴史的建築インベントリ再構築に関する調査研究
鎌田俊太郎・宇野拓也・倉林謙・橋原壮人・長太遥平 (指導：速水清孝 准教授)
14. 近世方丈型本堂の空間構成手法に関する一考察 宗像駿 (指導：大山亜紀子 助教)
15. 床衝撃音の評価方法に関する研究 高田潤 (指導：濱田幸雄 教授)

平成24年度 卒業式・修了式における表彰者

平成25年3月25日

◇斎藤 賞◇

修士論文「RC構造物におけるネットワーク及び補修剤を用いた自己修復コンクリートの開発」

大平旭洋（指導：Sanjay PAREEK 准教授）

◇北 桜 賞◇

修士論文「福島県内に立地する屋内子ども遊び場の利用実態に関する研究」

高守留珠（指導：若井正一 教授）

◇桜 建 賞◇

卒業設計「近い建築 ―ニュータウンの様相―」

阿部慎也（指導：浦部智義 准教授）

卒業論文「日本大学工学部図書館における耐震補強効果の検討」

藍澤友詩・石橋和晃・石山寛仁・今村翔太・小野栄憲・

片平めぐみ・黒木康平・佐藤妙子・宮内春樹（指導：千葉正裕 教授・日比野巧 助教）

卒業論文「新規な粉末防せい剤を利用したRC構造物用補修材料の防せい性」

手塚伸明・高野圭奈（指導：出村克宣 教授・齋藤俊克 助教）

卒業論文「福島県の歴史的建築インベントリ再構築に関する調査研究」

鎌田俊太郎・宇野拓也・倉林謙・橋原壮人・長太遥平（指導：速水清孝 准教授）

卒業論文「公園内における移動イス設置方法に関する研究」

大矢康隆・中谷哲郎（指導：土方吉雄 准教授）

◇優 等 賞◇

高橋寛子・松永一秀・本田未未

◇工学部長賞◇

学術・文化部門：阿部慎也

第4回ハーフィレ学生デザインコンペディション（株式会社ハーフィレジャパン主催）優秀賞受賞

「景観開花。9」（東北大学・災害科学国際研究所ほか主催）佳作及び特別協賛企業賞受賞

作品名「壁と生きる〜3つの壁による防潮堤との付き合い方〜」

学術・文化部門：佐藤雄太

第4回ハーフィレ学生デザインコンペディション（株式会社ハーフィレジャパン主催）優秀賞受賞

学術・文化部門：中井奨太

第16回JIA東北建築学生賞（社団法人日本建築家協会東北支部主催）東北専門新聞連盟賞

作品名「水と暮らす つかずはなれず」

学術・文化部門：遠藤安泰

住まいのインテリアコーディネートコンテスト 2012（社団法人インテリア産業協会主催）

課題分野A部門「私だけのインテリア空間」部門賞受賞 作品名「箱のマトリョーシカ」

◇校友会賞◇

宗像駿・中谷哲郎

学 術 発 表

＊届け出があった記事を掲載

■日本都市計画学会南東北ブロック学術交流会

日時：2013年3月2日 会場：まざっせプラザ（郡山市）

・景観協定策定手法に関する研究

○大佐古和明・土方吉雄・三浦金作

・公園内における移動イス設置方法に関する研究

○大矢康隆・土方吉雄・三浦金作

・ローマの街路空間における探索歩行時の注視に関する研究 一 経路選択と注視傾向について 一

○薄井謙・三浦金作・土方吉雄

■シンポジウム「東日本大震災からの教訓、これからの新しい国づくり」

日時：2013年3月27日 会場：建築会館会議室

・福島県須賀川市の復旧復興に関する記録保存と住民主導のまちづくりの在り方に関する調査研究

○市岡綾子

平成24年度卒業設計コンクール・展示会等出展作品

■日本建築学会「全国大学・高等専門学校卒業設計展示会」

中井奨太（指導：浦部智義 准教授）

壇山山頂 一過去から未来への風景の保存一

■レモン画翠「第36回学生設計優秀作品展」

阿部慎也（指導：浦部智義 准教授）

近い建築 一ニュータウンの様相一

■近代建築「卒業制作'13」掲載

鈴木貴史（指導：浦部智義 准教授）

成長への新たな介入 一羽黒山、修験の歴史を借りて一

■日本建築家協会「卒業設計コンクール2013」

大橋和也（指導：浦部智義 准教授）

群馬かるた [2012年度改訂版]

一文化を更新する地域づくり一

■日本インテリア学会「第20回卒業作品展」

中島彰紀（指導：浦部智義 准教授）

線状舞台 一“みち”がつなぐ人とまち一

学外展示作品（左記5作品に以下の3作品を加えた8作品）

立原幹之（指導：速水清孝 准教授）

ツナミのカタチ 一本格復興へとつなぐ大洗の箱一

磯野綾介（指導：市岡綾子 専任講師）

リトル・ピープルたちの試み 一コミットする町屋一

小山遥香（指導：速水清孝 准教授）

むでな島 一気仙沼大島復興計画一

今年度の卒業設計展は、2013年2月9日～2月13日の3日間70号館1階にて開催され、例年よりも多い30作品が出展した。震災復興をテーマとした作品や、福島県内ではなく地元出身地にちなんだテーマが例年よりも多くみられたことが特徴であった。13日午後開催されたプレゼンテーションには14作品が参加し、出席された常勤・非常勤講師との質疑応答が行われた。また、2月20～22日にはビッグアイ6階にて8作品による学外展示も開催された。